

## &lt;前回&gt;オリエンテーション

前期：キリスト教と近代的知

後期：方法論的考察と聖書の社会論

## オリエンテーション

## I：象徴・言語・システム

1. 象徴・言語 1
2. 象徴・言語 2
3. 象徴・言語 3
4. システム・宗教

## II：レトリック・メタファー

1. レトリック・メタファー 11/2
2. メタファー・モデル 11/9
3. イエスの譬え 11/16

## III：コミュニケーション・解釈

1. 伝統と意味の地平 11/30
2. 多元性と対話 12/7
3. イデオロギーとユートピア 12/14

## IV：宗教と文化——構造と動態 1/18

**I：象徴・言語・システム****1. 象徴・言語 1**

- (1) カントとドイツ古典哲学の課題（前期）
- (2) 哲学的象徴論——自然／文化／宗教
- (3) 言語哲学と象徴論

**2. 象徴・言語 2**

・リコールの言語論の展開：象徴論→隠喩論→テキスト解釈学（1960年代～1970年代）

Paul Ricoeur, *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, The Texas Christian University Press, 1976.

**3. 象徴・言語 3**

- (1) 非実在論としての近代宗教批判
- (2) カントの批判哲学を経た実在論（実在論の再興）
- (3) 言語の指示機能と実在論・真理論
- (4) 指示と実在をめぐって

**4. システムと宗教**

- ・言語：ラング（構造・意味、普遍性・可能性、公的）と  
パロール（出来事・指示、個別性・現実性、私的）の弁証法
- ・文化全般の分析へ拡張：構造・意味は、体系（システム）内部の関係性として理解できる。これを、宗教論に応用する試み。
- ・宗教を、精神の次元における生＝システムという枠組みにおいて議論する
  - ・システムと機能という議論（システム哲学・社会システム論）を手がかりに
  - ・文化における宗教の機能（IVへ）
  - ・次元の創発性、自己組織化（今年度は扱わない）

### (1) 社会システム論から宗教へ

1. 「システム／環境」：システムの自己完結性（構成要素の自己組織化）と環境開放性
2. システムの複雑性(Komplexität)：  
複雑性の縮退(Reduktion von Komplexität)：社会システムの中心的機能  
可能性の選択作用としての意味機能。選択＝排除・否定  
複雑度の落差＝システムの内と外の境界設定
3. 宗教：聖なるものという暗号によって、究極的に規定不可能なものを規定可能なものへと変換する機能。人間の経験と社会行為の有意義性の保証

### (2) ルーマンの社会システム論

4. オートポイエシス：閉鎖性と開放性とは相互補完的な関係にある。オートポイエシスのシステムは自律的(Autonomie)ではあるが、自足的(Autarkie)ではない。

### (3) コミュニケーションと観察

5. コミュニケーションの三要素：情報、伝達、理解
6. 観察
  - ・理解がうまく達成されない場合（コミュニケーションの過程がよどむとき）、コミュニケーションについてのコミュニケーションが必要になる。
  - ・観察とは、先行するコミュニケーションがどのように理解されたか、どのように理解されることを意図していたかという点から、必要な修正・説明を加えるコミュニケーション。観察という操作は、無限の操作となり、コミュニケーションの過程における意味の生成は、コミュニケーション過程内部では無限遡及することになり決定不可能となる（無限遡及のパラドックス）。
  - ・しかし、このような自己観察のパラドックスは、この自己自身においては観察されない（パラドックスにかかわらず、コミュニケーションは滞りなく継続されて行く）。これがパラドックスとして観察されるのは、他者観察においてである。システムにおいて必然的で代替不可能なものが、外部観察者にとっては偶然的に現れる。

### (4) 宗教とパラドックス

7. パラドックスー論理的意味論的（形式）
8. 神学的（内容）：三位一体論、両性論、受肉、復活、義認  
キルケゴール『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』
9. レトリック（効果）：言語の行為遂行性あるいは語用論  
反常識（para+doxa）の効果、驚き・発見・震撼・転換 → 思想・思考の基礎

### (5) ルーマンとティリッヒ

10. 暗号によるパラドックスの脱パラドックス化のパラドックス
11. 宗教と文化：意味世界とその根拠
  - ・意味：全体と部分（循環、要素間の関係性<差異と類似>、オートポイエシスの自己参照構造）  
人間経験の有意義性とその破綻（不幸）→ 本質的不安定さ（無根拠・偶然性）
  - ・宗教：意味システムの不安定さの自覚と最終的根拠の提示  
パラドックスの脱パラドックス化、そのための暗号（超越の形態化）
12. 宗教システムを外部から観察する。  
宗教システム自体の無根拠性・パラドックス  
では、神の根拠は？ → 神から神性へ、神と神性との二重化あるいは神秘主義  
再度差異化する。

## II : レトリック・メタファー

### 1. レトリック・メタファー

S. Ashina

**(0) 聖書からの具体例 (ヨハネ 6:22 ~ 59)**

1. イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来るものは決して飢えることがなく、わたしを信じるものは決して渴くことがない。  
ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのことをつぶやき始め、  
42 こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか。」  
52 それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。  
ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」  
このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。
2. 「イエス=命のパン」：字義通りの意味で理解すると、「人々」と同じ疑問を生じざるを得ない → 解釈の葛藤による意味の生成

**(1) 言語の諸レベルにおける隠喩の位置**

3. 語一文テキスト → 語の記号論/ 文の意味論/ テキストの解釈学 (リクール)  
隠喩は文のレベルの言語現象である。テキストのレベルへ議論を拡張する。
4. 経験-隠喩的象徴的言語 (物語) - 概念 (体系・形而上学)
  - ・ティリッヒ：『マールブルグ講義』 (*Dogmatik. Marburger Vorlesung von 1925*)  
「教義学とはわれわれに無制約的に関わるものについての学問的な語り (wissenschaftliche Rede) である」。
  - § 1.Satz: Dogmatik ist wissenschaftliche Rede von dem, was uns unbedingt angeht. (25)
    - (1) 無制約的な関わりレベル (無制約的な生の連関、信仰 Offenbarung/Glaube)
    - (2) 学問的な語りのレベル (wissenschaftliche Rede/Dogmatik/Symbol-Begriff)
    - (3) 学問のレベル (Wissenschaft, Metaphysik)
  - ・上田閑照：西田幾多郎『善の研究』における宗教 (禅) と哲学との関係 (上田、1991、235-265)。
    - (A) 「純粹経験」という根源的出来事のレベル。これはティリッヒの(1)に相当する。
    - (B) 「純粹経験」がそれ自身を唯一の实在として自覚し、確証したレベル (根本的自覚のレベル)。これはティリッヒで言えば、ほぼ(2)に相当すると言えよう。
    - (C) 「純粹経験」を唯一の实在としてすべてを説明しようと試みるレベル (「自己・世界」理解=哲学のレベル)。これはティリッヒの(3)に相当する。
 「また宗教と言語の問題に関して、キリスト教は言葉の根源としての沈黙を学ばねばならないし、仏教の方は逆に言葉に出ることを学ばねばならないということがよく言われますが、この両方向がやはり(A)-(B)-(C) 連関の内に入っているわけです。(A) への方向には沈黙の問題が含まれていますし、(C) への方向には言葉に出る問題が含まれていません」 (ibid.:264)。
  - ・宗教言語の様々な分類法。聖書学：ブルトマンの様式批判、神学：マッコーリー

**(2) 旧修辞学から新しい隠喩論へ****1) 伝統的隠喩論とその問題性**

5. This is a very schematic summary of a long history which begins with the Greek sophists, moves through Aristotle, Cicero and Quintilian, and which ends with the last treatises on rhetoric of the 19th century. What remains constant in this tradition can be summarized in the following

six propositions: (1) Metaphor is a trope, i.e., is a figure of discourse naming. (2) Metaphor is an extension of naming by a deviation from the literal sense of words. (3) The reason for this deviation in metaphor is resemblance. (4) The function of resemblance is to ground the substitution of the figurative meaning of a word borrowed from the literal sense of a word which could have been used in the same place. (5) The substituted meaning does not include any semantic innovation; we can thus translate a metaphor by restoring the literal word for the figurative word which was substituted. (6) Since it admits of no innovation, metaphor gives no information about reality; it is only an ornament of discourse, and therefore can be categorized as an emotional function of discourse. (Ricouer,c, 76f.)

6. 新しい理論によって乗り越えられるべき古い隠喩論 (ギリシアのソフィストに始まり、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスをへて、19世紀のレトリックについての論考において終わり告げた伝統)。

を次のようにまとめている (リクール, c, 76f.)。

- (1) 隠喩は比喩、すなわち命名に関わる。
- (2) 隠喩は言葉の字義的意味からの逸脱による命名の延長である。
- (3) 隠喩のこの逸脱の理由は類似である。
- (4) 類似の機能は同じ場所で使用可能であるような言葉の字義的意味から借用された言葉の比喩的意味を代用することを根拠付けることである。
- (5) 代用された意味はいかなる意味論的な革新も含まない、それゆえ、我々は、代用された比喩的意味に対する字義的言葉を回復することによって、隠喩を翻訳することができる。
- (6) 隠喩は革新を認めないのであるから、それは単なる言述の装飾にすぎない。したがって、言述の情動的機能として範疇化することができる。

↓

新しい隠喩論は、隠喩を言葉のレベルにおける意味の逸脱としてではなく、文のレベルにおいて可能になる隠喩表現をめぐる複数の解釈の葛藤 (相互作用) から可能になる新しい意味論的な革新の問題として捉える試みである。とくに、隠喩との関わりで伝統的に持ち出されるいわゆる「字義的意味」(literal meaning) という考えは、本質的な問題を含んでいる。

7. レイコフ: 伝統的な隠喩論の誤謬 = 「日常言語は字義的であり、隠喩的でない」

「すべての日常的言語は字義的であって、隠喩的ではない。すべての主題は字義的に隠喩なしに理解可能である。字義的言語だけが、偶然的に真あるいは偽でありうる。言語の文法において使用されるすべての定義はすべて字義的であり、隠喩的ではない」。(Lakoff, 1993,204)

隠喩は日常言語において重要な位置を占めているが、その表現が隠喩的であると意識されるのは、通常は隠喩的には理解されない多くの概念が存在することに基づいているのである。

Traditinal false assumptions:

All everyday conventinal language is literal, and none is metaphorical.

All subject matter can be comprehended literally, without metaphor.

Only literal language can be contingently true or false.

All definitions given in the lexicon of a language are literal, not metaphorical.

It is a system of metaphor that structures our everyday conceptual system, (Lakoff,1993,204)

A major difference between the contemporary theory and the classical one is based on the old literal-figurative distinction. (205)

## 2) 新しい隠喩論の試み

- ・古典的な隠喩観の誤謬＝「字義通りの意味」という考え

隠喩は言語表現の中に存在し人間の思惟や認識の構造には関わらないという見解（隠喩の没概念説）

思考がすべて隠喩的であり、隠喩なき言語や思考がないという見解（汎隠喩説）

- ・新しい隠喩論は、隠喩の問題は単なる言葉の問題ではない、むしろ人間の認知や経験の構造の本質的な契機であると主張する。「隠喩は詩人だけのものではない。それは日常言語に内在し、生、死、時といった抽象概念を把握するための主要な方法なのである」（レイコフ、1994、62）。とくに科学言語における隠喩論が示すように、隠喩は科学における発見の論理に属している。「場」「波」のイメージ

### 8. 「源泉領域から目標領域への写像」

既知の言語表現の意味を創造的に拡張することによって、新しい概念を構成する隠喩の能力の問題。源泉領域における推論構造の形式が写像によって保存され、目標領域の推論構造を規定する現象。

- ・「人生は旅である」「神は父である」

The metaphor involves understanding one domain of experience, love, in terms of a very different domain of experience, journeys. More technically, the metaphor can be understood as mapping ( in the mathematical sense ) from a source domain ( in this case, journeys) to a target domain ( in this case, love) . The mapping is tightly structured. There are ontological correspondences, according to which entities in the domain of love (e.g., the lovers, their common goals, their difficulties, the love relationship, etc.) correspond systematically to entities in the domain of a journey ( the travelers, the vehicle, destinations, etc.). (206f.)

- 9. 確かに隠喩は言語によって表現され、レトリックの中心問題である。しかし、「隠喩は単に言語の事柄ではなく、思惟と理性の事柄なのである。言語は第二次的であり、写像が第一次的なのである」（ibid.:208）。隠喩は、優れて現実の認知・認識（思想と経験の方法・あり方）に関わる問題であり、人間の日常的現実性の中心に位置するのである。

the mapping themselves are not propositions.

metaphors are mappings, sets of conceptual correspondences. (207)

The metaphor is not just a matter of language, but of thought and reason. The language is secondary. The mapping is primary. (208)

many of the most basic concepts in our conceptual systems are also normally comprehended via metaphor — concepts like time, quantity, state, change, action, cause, purpose, means, modality, and even the concept of a category. (212)

- 10. 隠喩はそれを使用することによって目標領域のそれまで十分に認知されていなかった構造が顕わにするという機能を有するのであり、それは隠喩の発見的機能に関わる問題である。

Richards: tenor-vehicle、Black: focus-frame、Beardsley: the metaphorical twist。

新しい意味の生成を帰結する、つまり焦点となった事柄の新しい意味理解を可能にする、これが隠喩表現の核心点なのである。したがって、隠喩とは新しいものの見方の発見。新しい写像の生成。

- 11. リクルールの関心：新しい隠喩的意味の生成（生きた隠喩・類似性の発見）

レイコフの関心：詩人によって新たに作り出された生きた隠喩とすでに辞書に編入され日常的に使用されている死んだ隠喩との共通の認知的構造。

- 12. 「私は命のパンである」：イエスについてのヨセフの息子（肉体と持った人間）とパ

ンという意味の多義性ではなく、イエスをについての二つの解釈・見方の衝突による意味のよじれと、それによって引き起こされる永遠の命をめぐるイエスの出来事についての新しい意味の生成である。こうして、パンとイエスの間に写像が構成され、イエスについての一連の認知が可能になるのである。

13. Metaphor depends on a semantics of the sentence before it concerns a semantics of the word. Metaphor is only meaningful in a statement; it is a phenomenon of predication. (Ricouer, c, 77)

Metaphor proceeds from the tension between all the terms in a metaphorical statement.

the first phenomenon is not the deviation from literal or proper meaning of words, but the very functioning of predication at the level of the whole statement. What we have called a tension is not just something which occurs between the two complete interpretations of the statement. (ibid.)

Metaphorical interpretation presupposes a literal interpretation which is destroyed.

Metaphorical interpretation consists in transforming a self-defeating, sudden contradiction into a meaningful contradiction. twist / shift / a semantic impertinence (78)

What is at stake in a metaphorical statement is making a "kinship" appear where ordinary vision perceives no mutual appropriateness at all. resemblance (79)

In this respect, metaphor is an instantaneous creation, a semantic innovation. (ibid.)

Two conclusion: (80)

1: true metaphors are untranslatable.

2: It includes new information.

In short, metaphor says something new about reality.

### (3) 隠喩の指示の二重性と実在の開示

14. 隠喩の指示(Referance/Bedeutung)。隠喩的表現と特徴づけられた宗教言語が、指示を持ちうるのか、あるいはその指示対象とはいかなる実在性を有するのか、という問いは、神学的実在論の最重要問題に他ならない。たとえば、イエスの「神の国の譬え」。

言語の指示とは、記号体系外部とその記号との関係。つまり、指示において問題となるのは、記号が自己完結的な存在ではなく、その外部を有すること。

↓

言語の外部とは何か。言語の世界、心の世界、実在世界、そしてそれらの彼方。

・素朴実在論・日常性（主観と客観の二元論）

言語の指示とその指示対象として、客体の世界（外界）

・素朴実在論の限界：文学的美的な言語使用や、宗教的な言語使用、さらには科学における理論言語についても、素朴実在論はそれぞれの言語使用の内的理由から成立が困難になっている（神は人間の言語表現の領域も日常性の領域も超えている。小説はフィクションでありノンフィクションではない。美的実在は物的実在に還元できない、など）。

15. 宗教言語、とくにその隠喩的表現とは？

・指示対象がいれば存在しない、あるいはその存在は重要ではない、という主張。

構造主義、あるいは詩的機能＝自己指示性（ヤコブソン）

ブルトマンの非神話論化：実在への指示から実存的決断の呼びかけへ

神話・世界観 信仰・主体性

16. 隠喩における指示の二重性（リクール）

隠喩・対象についての複数の解釈の相互作用

## S. Ashina

- 日常言語におけるような日常的経験的実在への指示機能は中断される（＝第一度の指示の中断）。  
意味の隠喩的歪み・よじれ：その意味に基づいて生じる指示対象の確定を不可能にする。
- 第一度の指示の中断を条件とした第二度の指示作用の発生。  
フィクションは現実ではないということを否定的な条件として、それ固有の世界を指示する。
17. 第二度の指示の指示対象：実在の日常的イメージの模倣ではなく、実在の新しい解釈・見方の開示であり、前方へと投影され再構成された実在。  
「神の国」の現実性とは。  
譬えは日常的な経験世界の事物を素材とした物語であるが、それが神の国の現実を指示するためには一端日常的な指示が中断されねばならない。その上で神の国の現実がテキストの前方に開示される必要がある。
- ・ブルトマン学派における「言葉の出来事」：譬えの言語表現の日常的な指示の中断を通して、あるいはこの言語表現において神の国の実在が経験の世界へ開示されること、その意味で出来事として神の国が生起することを意味すると解釈できる。
18. the metaphorical interpretation gives rise to a re-interpretation of reality itself, in spite of, and thanks to, the abolition of the reference which corresponds to the literal interpretation of the statement. (84)  
it is the function of poetic language to weaken the first-order reference of ordinary language in order to allow this second-order reference to come forth. (ibid.)  
the connection between the two notions of heuristic fiction and of redescription by transference of the fiction to reality itself (85)  
literal falsity consists in the misassignment of a label; metaphorical truth, in the reassignment of the same label by transference. (87)  
Poetic language also speaks of reality, but it does so at another level than does scientific language. …… But in the very measure that this first-order reference is abolished, another power of speaking the world is liberated, although at another level of reality. This level is that which Husserlian phenomenology has designated as the Lebenswelt and which Heidegger has called "being-in-the-world." (ibid.)
19. 人間の日常性事態が隠喩的構造を有するとすれば、虚構と現実の二分法も廃棄されねばならなくなる。では、真理の基準とは何か。歴史に対する文学の優位（アリストテレス）。

## &lt;まとめ&gt;

- ・隠喩（レトリック）は、認知の問題である。  
自己と世界（との相関性）、そして超越的なもの。
- ・隠喩は、発見に関わる。新しい隠喩の試みとその成功と失敗。  
言語共同体とそこにおける受容。
- ・隠喩の意味と指示。文のレベルでの意味の緊張 → 第一度の指示の中断と第二度の指示の生成（世界の開示）  
隠喩の最初の発見・類似の発見 → 隠喩表現の伝達・類似の発見 → 隠喩の受容
- ・隠喩（類似関係）— 換喩（metonymy、現実世界での隣接関係、空間と時間）  
— 提喩（synecdoche、意味世界での包含関係、類と種）

↓

これから、人間の基本的な認知構造に関わっているが、特定の宗教を特徴付ける特定の認知構造は存在するか？

ヘブライズムとヘレニズムは、換喩と隠喩の対比と重なるか。ハンデルマン。

・宗教的現実・実在（神の国）とはいかなるものか。

言葉の出来事（Sprachereignis, Wortgeschehen）→正典・靈感とは何か。動的靈感説。

#### <参考文献>

1. 佐々木健一編『創造のレトリック』勁草書房。
2. 佐藤信夫『レトリック感覚』、『レトリック認識』、『レトリックの記号論』講談社。
3. 瀬戸賢一『レトリックの宇宙』海鳴社、『レトリックの知』新曜社、『認識のレトリック』海鳴社、『認知文法のエッセンス』（ジョン・R・テイラーとの共著）大修館書店。
4. 上田閑照『西田幾多郎を読む』岩波セミナーブックス。
5. Paul Ricouer :
  - a. *La métaphor vive*, Seuil, 1975.
  - b. "Biblical Hermeneutics (*Semeia*. 4, the Society of Biblical Literature)," 1975, pp.27-148.
  - c. *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, The Texas Christian University Press, 1976.
6. George Kakoff and Mark Johnson, *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press, 1980.  
George Kakoff, "The contemporary theory of metaphor," in: Andrew Ortony (1993), pp.202-251.  
ジョージ・レイコフ、マーク・ターナー『詩と認知』紀伊國屋書店、1994年。
7. Andrew Ortony (ed.), *Metaphor and Truth* (Second Edition), Cambridge University Press, 1993.
8. Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.
9. Janet Martin Soskice, *Metaphor and Religious Language*, Clarendon, 1985.
10. Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.
11. William Schweiker, *Mimetic Reflections. A Study in Hermeneutics, Theology, and Ethics*, Fordham University Press, 1990.
12. Manfred Kaempfert (hrsg.), *Problem der religiösen Sprache*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1983.
13. Reinhold Bernhardt, Ulrike Link-Wieczorek (Hg.), *Metapher und Wirklichkeit. Die Logik der Bildhaftigkeit im Reden von Gott, Mensch und Natur*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1999.
14. 小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会、2002年。
15. Susan A. Handelman, *The Slayers of Moses. The Emergence of Rabbinic Interpretation in Modern Literary Theory*, State University of New York Press, 1982.  
スーザン・A. ハンデルマン『誰がモーセを殺したのか』法政大学出版局、1987年。  
Ora Wiskind Elper and Susan Handelman (ed.), *Torah of the Mothers. Contemporary Jewish Women Read Classical Jewish Texts*, State University of New York Press, 2000.
16. James K.A. Smith, *Speech and Theology. Language and the logic of incarnation*, Routledge, 2002.
17. Philip Burton, *Language in the Confessions of Augustine*, Oxford U.P., 2007.
18. 武藤慎一『聖書解釈としての詩歌と修辞——シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス』教文館、2004年。